

シリーズ研修「看護研究研修」受講者の研修後における意識調査

I. はじめに

長崎県看護協会では、看護研究の基礎的手法を理解し、臨床での看護実践の中から研究課題を見出し、その課題克服に必要な研究方法と研究的態度を身につけることをねらいに、平成18年度から研究の一連の過程を学ぶためのシリーズ研修「看護研究研修」を実施している。受講条件として3年以上の臨床経験があり、研究計画書を初回に提出できるとし、講義・演習・個人指導を受けながら、発表に向けて約5ヶ月の研修期間となっている。平成26年度までに437名が受講しており、研修終了後に毎年「研修参加後の達成度」や「研修全体での学び」などについてアンケート調査を実施している。その中で、研修会終了後の発表についての回答は、50~65%が「研修終了後、研究発表を行う」、30%が「取り組んでみたい」、10~20%が「わからない」であった。平成18年の研修開始から8年が経過した。しかし、研修受講終了後に実際研究発表を行ったかどうかの調査は実施していない。そこで、本研修受講終了後に看護研究への取り組み方や、研修終了後の成果として発表まで至ったかを明らかにし、今後の看護研究研修のあり方を検討したので、ここに報告する。

II. 研究目的

本研修受講終了後の看護研究への取り組み状況や、成果として発表までできたのかを明らかにし、今後の研修のあり方を検討する。

III. 研究方法

1. 調査期間：平成28年1月10日～平成28年1月31日
2. 調査対象：平成18年度から26年度までの「看護研究研修」受講終了者437名
3. 調査方法：自記式質問紙を作成し所属施設に郵送し回収。
4. 調査内容
アンケート用紙は独自に作成し、調査項目は対象の属性、参加動機、研修終了後の発表の有無、発表状況、発表後の成果、本研修の効果、自施設の支援体制とする選択回答方法。
5. 分析方法：エクセルの単純集計

IV. 倫理的配慮

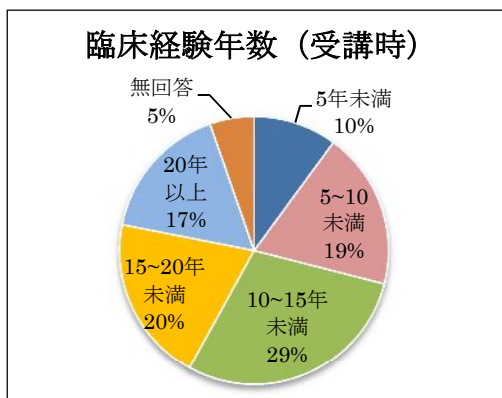
本研究は、長崎県看護協会倫理委員会の承認を得て実施した。回答は無記名とし、個人や施設が特定されることはないこと、データ入力にはコード化し、匿名性の確保に留意した。

V. 結果

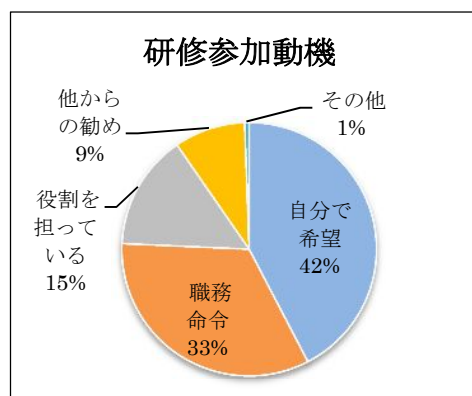
1. 質問紙の回収数169部、回収率37.8%

2. 対象の属性

1) 臨床経験年数 (受講時) (n=169)

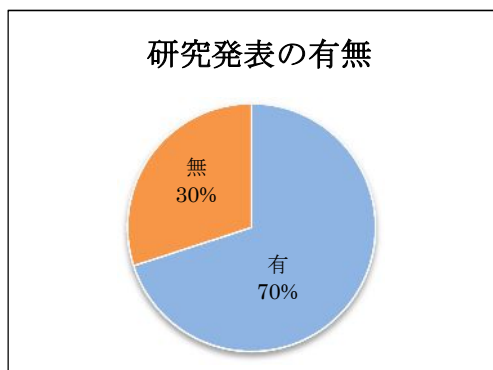


2) 研修の参加動機 (n=169)

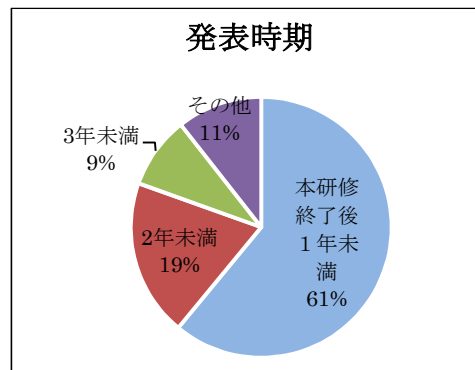


3. 研修終了後の研究発表について

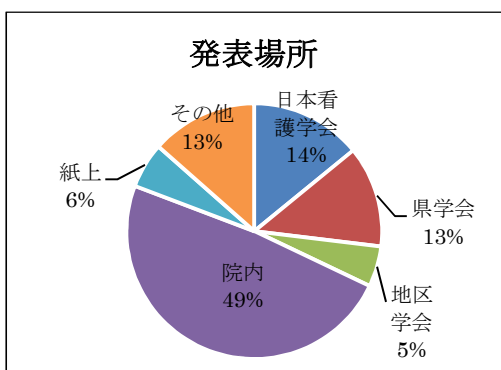
1) 発表の有無



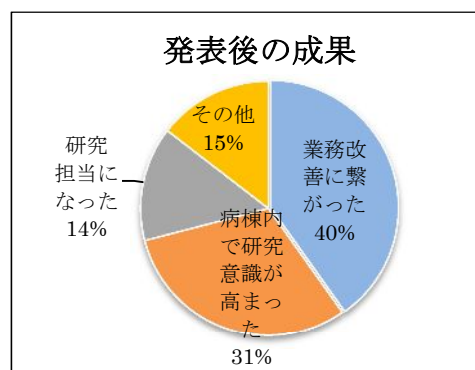
2) 発表時期



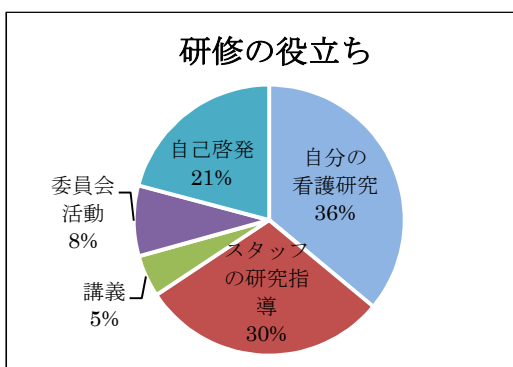
3) 発表場所



4) 発表後の成果

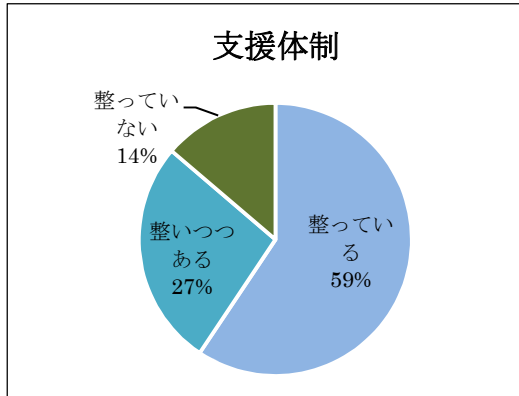


5) 研修の役立ち (研修の成果)

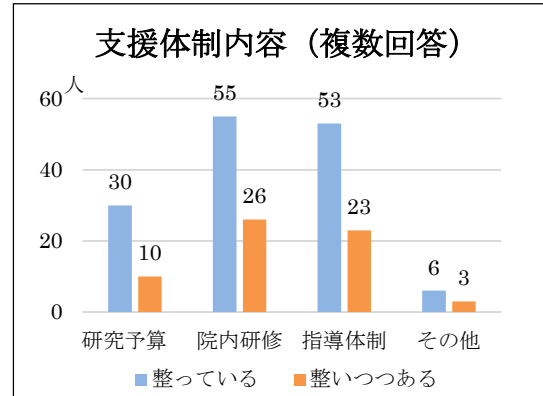


4. 自施設での看護研究の支援体制について（複数回答）

1) 支援体制



2) 支援体制内容（n = 169）



VI. 考察

研修終了後発表した割合は、今回回収したアンケートでは70%の人が発表をしたと回答していた。発表場所は院内が49%、院外が32%であった。また、発表後の成果として、「業務改善に繋がった」「病棟内の研修の意識が高まった」「研究担当者になった」など本看護研究研修のねらいである、「看護実践の中から課題を見出し課題克服に必要な研究方法と研究態度をみにつける」ということが実践できたと考える。また自施設での看護研究に対する支援体制は、「整っている」「整いつつある」を合わせると約8割で、内容として「指導体制」「院内研修」が整っていると回答しており、院内でも看護研究に取り組む意識が高く、研修受講と並行して院内でもフォローを受けることができる体制であったことが分かった。

岩瀬ら¹⁾は看護師が研究を行うことの意義の中で「看護師が研究することは、看護の質向上、専門職としての責務、日々の看護を振り返る、自己研鑽などの意義があると8割の看護師の回答があった」と述べている。看護研究は実践のエビデンスとなりケアの向上のためには必要なことである認識は高いが、臨床では勤務をしながらの研究となり時間的な制約や、研究に不慣れなど実践が困難と思わせる要因が多い。また院内の支援体制が整っていない場合は個人の負担はさらに大きくなる。本研修の参加動機に「自分で希望」が最も高いのは看護師としての責任と研究の意義について認知しているためであると考えられる。看護研究研修は、臨床の看護師にとって研究を達成するためには必要とされており、シリーズ研修として今後も継続させる必要があると言える。

今回のアンケート回収率は37.8%と低かった。研修受講時の所属施設に郵送したため、同じ施設に就業しているかどうか不明であったことや、研修終了後から8年間という時の経過も回答の有無に影響を及ぼしたと考える。回収率が低かったため、結果の信頼度に欠けることは考えられるが、研修受講者の意見としてはこれまでの研修の評価として大いに参考になるものといえる。

VII まとめ

看護研究研修を受けた後、発表した割合は70%と高く本協会看護研究の成果として評価できるものであった。院内の支援体制も「整っている」「整いつつある」を合わせると約80%であり、看護研究に取り組む意識が高いことが伺えた。研修の参加動機に「自分で希望」が最も高かった。看護研究研修は、臨床の看護師にとって研究を達成するためには必要とされており、シリーズ研修として今後も継続させる必要があると言える。

引用文献

1. 岩瀬裕子・田中英子・柴田恵子；臨床における看護研究支援—看護師の認識調査の分析を通して—第38回日本看護学学会集（看護管理）P448~450.2007
2. 南沢汎美. 他：臨床看護研究実施上の困難と克服課題 第一次調査報告 日本看護科学会誌 18(1),p.52~59,1998

参考文献

1. 出澤一美・田辺 庚・由上恵子他；支部教育における「看護研究研修」7年間の評価 第24回日本看護学学会集（看護管理）p113~115.1993
2. 岩屋英美・吉留厚子・黒田なおみ他；大分県看護協会における教育研修に関するニーズ調査 看護展望 p107~110.2001
3. 文 才理・兼宗美幸・高橋政子他；A 県看護協会主催の個人を対象にした長期看護研究研修の成果 第37回日本看護学学会集（看護管理）p297~298.2006
4. 平松みどり・河合敏子・山田恵子他；臨床看護研究の支援体制を充実させる取り組み—研究に取り組んだ看護師の面接から「阻害因子」を知る—第35回日本看護学学会集（看護管理）P9~11.2004
5. 鈴木久子・山本さつき・佐藤奈津子他；A 病院の看護研究に対する意識—看護研究経験者へのアンケート調査—第41回日本看護学学会論文集（看護教育）P342~345.2010
6. 下浅有子・坂上節子・須田山まさ子他；看護研究に対する意識に影響を及ぼす要因分析 第32回日本看護学学会集（看護管理）P97~99.2001
7. 佐々木美乃・柄澤みゆき・田中祐子他；看護研究の取り組みに対する負担感の内容—研修委員として院内看護研究の支援を考える—第43回日本看護学学会論文集（看護教育）p134~137.2013
8. 田中梨恵・大上戸薫・小林朋子他；臨床看護師の過去の看護研究実績と研究に対する意識の関係 第44回日本看護学学会論文集（看護教育）p244~247.2014